

“Meditations for a Savage Child” を読む

——歴史の発掘者リッチ——

加 茂 映 子

A Reading of “Meditations for a Savage Child”

—Adrienne Rich, Reviser of History—

Eiko KAMO

ABSTRACT: This report treats “Meditations for a Savage Child” by Adrienne Rich, one of the poems in her seventh book, *Diving into the Wreck*. In this title, the ‘Wreck’ is this world, which stands on the brink of ruin. ‘Diving into the Wreck’ means that we who are alive now should recognize the danger and avoid it by going down into the sea and examining the wrecked vessel. The fact that “Meditations for a Savage Child” is placed at the end of the book expresses its importance among the poems in this book.

The form of this poem is unique. At the beginning of each part—this poem consists of five parts—Rich presents an extract from a report by Dr. G. M. Itard about the education of a wild boy who was found in a village in southern France at the very end of the 18th century.

Then her own poem follows part by part. By adopting this technique, Rich lets us compare the two. She intends us to reconsider the great achievement of Dr. Itard, by this juxtaposition.

The content of this poem is also very serious and urgent. This boy had grown up alone from childhood, perhaps as the result of some inhuman treatment by adults. Then he was recaptured and educated as a member of the civilized world. Using his report as an occasion to express her thoughts and feelings, Rich reconsiders what human beings are. She reveals the relationship of human beings with nature, the relationships between human beings, especially powerful people—politicians, authorities, doctors and scientists (they are all men) and powerless people—children, the disabled, the retarded and women. She describes injuries on both the heart and the body. Her thinking extends to primitive men and their state, in contrast with the pollution and destruction of nature by civilization and war. This poem calls our attention to the world which is now on the brink of extinction.

京都大学医療短期大学部教養科

Division of General Education College of medical Technology, Kyoto University.

1987年7月16日受付

“Meditations for a Savage Child” はエイドリアン・リッチ Adrienne Rich (1929-) の第7詩集の最後に置かれた詩である。まず、この詩集につけられた表題 *Diving into the Wreck* について考えてみたい¹⁾。これは海底深く下降し、沈没した難破船の状況を探ることを意味する。この難破船とはすなわち、われわれが現在生きているこの世界である。そしてこの危機的な状況の調査のために海底へ向かうことがすなわち、危機的な状況を打開する道を開くことにもなるのである。なぜなら、海は地球上の生物がはじめて生命を与えられたところであり、今そこへと降りてゆくことは、人間が興した文明、地球を繁栄させて来たが、また現在の地球の危機をもたらした文明に背を向けて、原始の世界を探索し、そこに地球の再生を求めることを意味しているからである。

人類の歴史をさかのぼってそこに人間の本質を、あるべき姿をとらえ直そうとするこの態度はこれまでの歴史の見方に新しい光をあて、埋もれた事実とひそめられた思いを発掘する。*Diving into the Wreck* 以前の詩において、すでにリッチはこの発掘を行ってきた。兄ウィリアム・ハーシェルの名声の影に隠れたカロライン・ハーシェルの生涯に光をあて²⁾、己が身を「装填された銃」と実感しながらひそやかに生きたメアリ・ディキンソンをそのアマストの住居から呼び出し³⁾、男性社会から怪物「ハーピイ」‘harpy’ と呼ばれたメアリ・ウルストンクラストの苦い思い出を分かち⁴⁾。また詩 “Power” (1974) においてリッチはマリ・キュリの名声と業績がその身に受けた放射能障害と引き換えのものであることを告げる⁵⁾。だがリッチの発掘は女性に限られない。デイドロ (1713-84)⁶⁾ やサミュエル・ジョンソン (1709-84)⁷⁾ の言辞やジョン・ダン (1572-1631)⁸⁾ の詩行を皮肉たっぷりに引用することによって、女性がいつの時代にも真剣に取り扱われる対象とみなされていなかったことを明らかにする。またリッチは、このような女性が受ける抑圧を主題とした戯曲を書き、彼自身も類似した問題に悩み、そのために社会に挑み続けたイプセン (1828-1906) にある種の共感を抱き、彼を一世にさかのぼるノルウェイから呼び起こす。イプセンの最後の作品 *When We Dead Awaken* (1899) は *Diving into the Wreck* 中の詩の題名とされ、またリッチが歴史の「見直し」‘re-vision’ を訴える評論の題名ともされている⁹⁾ ことはリッチのイプセンへの傾倒を示しているが、それは全面的な傾倒というよりむしろ、イプセンの作品を、埋もれひそめられた女性の歴史を照らし出す鏡として、対位的に用いているのである。

“Meditations for a Child” もまた歴史に残るひとつの出来事を再検討することによって新しい光をあてようとしたものである。リッチは、フランスの医師イタル (Jean-Marc Gaspard Itard) (1774-1838) による野生児ヴィクトール (Victor, イタルがつけた名) の教育という業績に改めて問題を投げかける。

しかし、この詩が上に挙げた数篇の詩と異なる点はまずその形式にある。5部から成るこの詩の各部の冒頭にリッチはイタルの野生児の教育記録の抜粋をそのまま掲げる。しかしこの抜粋は教育記録のごく一部分であるので、読者は記録を全部読んだ方がよいであろう。またそのような気持になるであろう。なぜなら、リッチは両者を並べて置くことによって読者に主体的な思考と検討を促すからである。そしてその記録を新しい視点からとらえ直すことを迫るからである。

このような形式上の特徴——散文と自作の詩とが前後して置かれる——を持つ詩はこれが最初ではない。第6詩集 *The Will to Change* (1971) 中の “The Burning of Paper Instead of Children” (1968) にも見られる。この詩の中に取り入れられた散文のひとつにニューヨーク市立大学での公開講座に参加した学生の文章がある。その学生の社会批判は痛烈である。稚拙で初歩的な文法上の誤りすらあるその文章のたどたどしさに彼の内奥からの叫びがこめられている。カルストーン (David Kalstone) はリッチの第6詩集 *The Will to Change* を「たぐい稀な詩集」‘an extraordinary book of poems’ であり、「囚人の日誌の切迫感がある」‘it has the urgency of a prisoner’s journal’ と述べ、

第7詩集 *Diving into the Wreck* をこの「ジャーナル」の続篇と規定している¹⁰⁾。散文を詩に取り入れることは「ジャーナル」的な特徴の実例のひとつといえよう。以前からリッチは詩の形式の変革について考えてきた。すでに第3詩集の詩には形式の変化の試みがみられる。その後の詩においては詩に報道の性質を持たせ、訴えの力を強めるための工夫を凝らしてきた。絵画、写真、映画の手法を詩の中に取り入れようとする試みがなされてきた。このことはリッチが十代の娘の頃に報道記者になることを夢みたことと無縁でないかも知れない。

歴史の「見直し」を示唆するものとしての“Meditations for a Savage Child”の第二の点はその内容にある。この詩がわれわれ現代の人間に差し迫っている諸問題を扱い、警告を発していることにある。しかし、これについては先に述べた第7詩集の表題の意味とある程度重なるので、以下においては各部ごとにはじめに原詩を引用し、解釈を加えることによって、このわれわれ自身の問題をも考察することにしたい。

1799年南フランスの村アヴェロンで放浪していたところを見つけられた男の子は、パリ国立聾啞学校の住み込み医師イタルの許で教育されることとなった。当時、この子どもを文明社会に適応するように教育することは社会が担うべき義務であるとの認識があった。それゆえ、イタルの記録はこれが科学の分野で新たな光を投げかけるに相違ないと信ずる政府への報告書であることもうなづけるものがある。

この子の年齢は11～12才と推定された。久しく人間と暮らすことがなかったことは明らかで、言語はもちろん話さず、木の実などを食べてきたらしい。当時第一級の精神医学者と目されたピネル(P. Pinel)はこの子を「白痴であり、治癒、教育は不可能」¹¹⁾と診断したが、イタルは「人は生まれた時は白紙の状態にあり、経験や環境を持たなかったためにこうした状態にあるのだ」¹²⁾と考え、この野生児の社会化に体当たりした。実際、この報告書から野生児ヴィクトールに対するイタルの洞察力、実験的な試みを工夫し実行する熱意、そして何よりもこの子への深い愛情を読み取ることが出来るのである。第1部を引用する。

*(The prose passages are from J-M Itard's
account of The Wild Boy of Aveyron, as
translated by G. and M. Humphrey)*

I

*There was a profound indifference to the objects of our pleasures and of our
fictitious needs ; there was still...so intense a passion for the freedom of the
fields...that he would certainly have escaped into the forest had not the most
rigid precautions been taken...*

In their own way, by their own lights
they tried to care for you
tried to teach you to care
for objects of their caring :
glossed oak planks, glass

whirled in a fire
to impossible thinness

to teach you names
for things
you did not need

muslin shirred against the sun
linen on a sack of feathers
locks, keys
boxes with coins inside

they tried to make you feel
the importance of

a piece of cowhide
sewn around a bundle
of leaves impressed with signs

to teach you language :
the thread their lives
were strung on

〈この子は〉われわれの快楽や人為的欲求の対象に対して完全に無関心〈であった。〉野外で自由にふるまうことへの熱狂的な愛好〈があったので〉嚴重に警戒していなかったら森に逃げ込んだに違いなかった¹³⁾。

私たち文明社会の人間が欲求するものと、野生児が求めるものとは異なっているということ、しかし文明社会の人間が野生児の側に身を置いて考えたり感じたりしてみようと思うことはまずあり得ない、ということがここに示されている。野生児と同じ立場に立つことは不可能であり、リッチ自身そうしようとしているわけではない。しかし野生児の側に身を置くと世界がどのように見えるか、どのような感じかするか知ろうと努めている。これは同名の映画で監督トリュフォがイタールに扮した¹⁴⁾のと対照的な態度である。

ここで詩の行の独特な配置に注目したい。頁の左側の始めの4行では‘care’あるいは‘caring’が3度繰り返され、文明社会の人間がこの子に対して愛情をかけようとする気持が強いことを示しているが、同時にこの愛情が実は全く彼らの自分本位な姿勢からのものであることをも強調する効果を持っている。この4行と対角線をなして向かい合って右側では、文明社会では貴重なものとされている重厚なあるいは繊細な調度類が列挙されているが、同時にその品々はその有用性や美と無縁なこの子の目を通して認識され、それゆえその無用さもまた強調されるのである。以下、頁の左右に分けられ、対角線をなして配置された部分についても同様のことが言えよう。左側に置かれた‘need’, ‘importance’ が強調しようとする、文明人にとってかけがえのない室内装飾品はこの子にとっては無用なものとされる。優美なカーテンや安眠を誘う枕、錠前やかぎ、小箱やその中の貨幣、書物や文字、そして言語さえもが無用なものと映るのである。このような認識が文明社会のわれわれにとっては途方もなく馬鹿げたものに思われる。

だが果してそうであるのだろうか。大切なことは相手の立場に立って世界を見るとどのように映

るのか、どのような印象を受けるのかを想像するだけの心のしなやかさとひろやかさを持つことではないだろうか。社会の中で相手が自分よりも無力な立場に置かれている場合にはなお一層このことが留意されなければならない。もっとも、このことを示唆するのにリッチが文明人の用いる手段、すなわち言語に頼らざるを得ないということは避けようがない事実ではあるのだが。

II

When considered from a more general and philosophic point of view, these scars bear witness...against the feebleness and insufficiency of man when left entirely to himself, and in favor of the resources of nature which...work openly to repair and conserve that which she tends secretly to impair and destroy.

I keep thinking about the lesson of the human ear
which stands for music, which stands for balance—
or the cat's ear which I can study better
the whorls and ridges exposed
It seems a hint dropped about the inside of the skull
which I cannot see
lobe, zone, that part of the brain
which is pure survival

The most primitive part
I go back into at night
pushing the leathern curtain
with naked fingers
then
with naked body

There where every wound is registered
as scar tissue

A cave of scars!
ancient, archaic wallpaper
built up, layer on layer
from the earliest, dream-white
to yesterday's, a red-black scrawl
a red mouth slowly closing

Go back so far there is another language
go back far enough the language
is no longer personal
these scars bear witness

but whether to repair
or to destruction
I no longer know

これら消去出来ない多くの証拠は、この不幸な子が、長期にわたって完全に遺棄されていたことを示している¹⁵⁾。

イタールの報告書では上に挙げた個所にすぐ続いて第2部の冒頭の引用部分が続く。

もっと一般的、哲学的見地からするならば、これらは、自分の力だけに委ねられた時の人間の弱さとか無能力[といった主張]に対する反証であると共に、自然の豊かさをとも証明していることになる。自然というものは見かけ上は矛盾する法則に従って、自らひそかに傷つけたり解体したりしようとするものを、公然と修復し維持しようとするのである¹⁶⁾。

この子は身体の至るところに形も深さもまちまちの傷跡があり、その数は23にのぼったと言われる¹⁷⁾。実はこの子は聾啞であった。それも特殊なものであった。森の中を放浪している間、この子の耳は身に迫る危険を知らせるかすかな物音を聴きつけたはずである。それゆえ、耳が全く聞こえないというのではなかったが人間の社会生活の中で生じる音は受けつけなかった。この子の聴覚器官は個体保存の手段としてのみ機能した、とイタールは記している¹⁸⁾。I keep thinking about the lesson of the human ear / which stands for music と述べる時、リッチはこの子の特殊な動物的な聴覚の働きのことを思い浮かべていたと思われる。その上この子は訓練を重ねた後でも特殊な動物的な音声の他は発音することが出来なかったが、これもまた会話によって発声器官を訓練する機会がなかったことによるとイタールは記している¹⁹⁾。リッチは which stands for balance' と述べるが、これは平衡感覚を意味し、かなり動物的な働きといえる。それはリッチに猫の耳を連想させる。外から見える螺旋状の、あるいは尾根のように隆起した耳殻、それは外からは見えない脳の内部とも何か関連がありそうに思われてくる。このような脳の働きは太古の昔から今日に至るまで保持されて来た、生物としての機能であり、人間の本質の解明のかぎはその辺りにもあるのかも知れない。それゆえ、リッチの関心はわれわれ文明人の意識の根底にあるであろう原始性に向けられる。夜はその探索の時としてまことにふさわしい。自己の内なる太古の原始性を探るこの意識的行為をリッチは pushing the leathern curtain / with naked fingers/ then / with naked body と表現する。太古の人々が生活を営んでいた洞穴へと、皮膚はまだ荒い毛におおわれ、何も身にまとわぬ原始人として自分が入っていくような気がする。身体に刻まれた傷跡のひとつひとつはその人が生きてきた歴史そのものである。

洞穴のイメージと傷跡のそれとが重なり合う。この子の皮膚に刻まれた古い傷跡の色は薄らぎ凹凸も消えたが、新たな傷はなお昨日までも刻まれ、口をあけた赤い傷が今ゆっくりとふさがろうとしている。そしてこの経過はまた、リッチにとって太古の昔、洞穴に住んだ人々が壁に刻みつけてきた生活の記録とも見えるのである。傷は 'a red mouth' と表現されているが、このことはまた、原始人が何か言い表わそうと口を開けたが未だ言語となるに至らない状態を表わすと同時に、野生児の未成熟な発声器官の状態を表わしていると思われる。そしてこのことは過去の事として、また野生児という文明人から見れば別種の存在の他人事として看過すべきことではない。それゆえ、リ

ッチは Go back so far there is another language と読者を促す。時代に逆行することをすすめているのではない。人間の本質をそこに求めよと言うのである。そのことは次の2行 go back far enough the language / is no longer personal にも示されている。リッチは言語が権力の道具と化することを懸念している。なぜなら言葉を作り、それに意味づけを行なうのは常に強者であるのだから。弱者に言葉はなかった。「戦火に村を追われ、身体中雲形模様にとだれたアルジェリアの人達が医者に痛みを訴えようとしても言葉にならず、痛む身体をつきつける他にすべがない」²⁰⁾ ように、言語は「抑圧者」のものとなっているが、それでも「この弱者の苦悩を伝えるためには抑圧者の言語に頼らざるを得ない」²¹⁾。因みにリッチは次の詩集の表題を *The Dream of a Common Language* (1978) としている。

さて、part II の最終部 These scars... 以下においてリッチは冒頭に掲げたイタールの言葉 These scars bear witness, repair, destruction (destroy の変形とみなす) を用いている。しかしリッチはイタールとは異なり、問題を提起するだけである。自然が人間に及ぼす力についても明快な結論はないままに Part II は終る。

III

It is true that there is visible on the throat a very extended scar which might throw some doubt upon the soundness of the underlying parts if one were not reassured by the appearance of the scar……

When I try to speak
my throat is cut
and, it seems by his hand

The sounds I make are prehuman, radical
the telephone is always
ripped-out

and he sleeps on
Yet always the tissue
grows over, white as silk

hardly a blemish
maybe a hieroglyph for scream

Child, no wonder you never wholly
trusted your keepers

もっとも首の上方前部にかなり大きな傷跡があったので、外見だけからの判断では心もとないと思っている人たちは、内部組織が健全なのかどうか疑いを持ったようだった²²⁾。

この傷は part II で扱われたのとは別のものである。結局、この喉の傷は発声器官に致命的な影

響を与えてはいないことがわかったけれども、この傷はリッチに大きな衝撃を与えた。リッチは文明社会の一員として自分が彼を傷つけたような気になる。それゆえに彼女の喉がこの子の手によって掻き切られるような感じさえ覚えるのである。単なる被害妄想ではない。彼に共感し得る能力をリッチが持っていること、原始性へ回帰する能力を持っていることを示しており、彼に共感する時、彼女の声は文明によって教化される前の動物性を帯びる。ここで用いられる現代文明の産物、しかもあまりにも普及しているのでその必要性が忘れられがちな、電話への連想はまことに巧みであるといえよう。the telephone is always/ripped-out はこの行為を破壊的とみなす文明人の恐怖心があらわれている。リッチもこの子への共感を持ち続けることは出来ない。この子が実際しばしば電話線を引きちぎったのではないであろう。電話の発明者グラハム・ベルは1847年の生まれであるから。電話線の切断は現在でも時として起こり、暴力的行為とみなされている。リッチはこの行為に恐怖すると同時に、この行為を物言えぬ弱者としての野生児のそれと重ね合わせたのかも知れない。次行 and he sleeps on は、この子は文明社会に戻ったけれどもその精神は目覚めることがないとの意味であろう。そしてこの精神の眠りと対照的に傷跡は盛り上がり、絹布のような白い光沢を放つ。それは判読可能な象形文字と化して無言の叫び声をあげている。リッチはこの傷に強者が抱く非情を認める。part II の中で he と呼ばれたこの子は最終部で再び you と呼びかけられる。リッチはこの子の側に視座を据えようと努めている。この時 'keepers' は「保護者」よりもむしろ「飼主」を意味することになるであろう。

IV

A hand with the will rather than the habit of crime had wished to make an attempt on the life of this child...left for dead in the woods, he will have owed the prompt recovery of his wound to the help of nature alone.

In the 18th century infanticide
reaches epidemic proportions :
old prints attest to it : starving mothers
smothering babies in sleep
abandoning newborns in sleet
on the poorhouse steps
gin-blurred, setting fire to the room

I keep thinking of the flights we used to take
on the grapevine across the gully
littered with beer-bottles where dragonflies flashed
we were 10, 11 years old
wild little girls with boyish bodies
flying over the moist
shadow-mottled earth
till they warned us to stay away from there

Later they pointed out

the venetian blinds
of the abortionist's house
we shivered

Men can do things to you
was all they said

これは常習犯のしたことというより、何者かが出来心からこの子の生命を狙ってしたことらしかった。この子は死んだものと思われ、森にうち棄てられたままだったのに、自然の助けだけで傷をすぐに治癒できたものと想像できる²³⁾。

この部分は part III の引用にすぐ続いている。ここで言及される幼児の「遺棄」をきっかけとしてリッチは幼児殺しの歴史を取り上げる。

母親が乳児や幼児を捨てたり殺したりせざるを得なかったことが述べられる。母親は心身の苦痛にひとり耐えねばならなかった。*Of Woman Born* (1976) はこのことを詳細に調査し女性が受けた抑圧の原因や影響について論じている²⁴⁾。さらに、I keep……以下では母体内での殺人である妊娠中絶について述べられる。それはリッチの少女時代の体験として語られる。中絶が行われるのはうらぶれた隠れ家で、それでもぶどうが蔓をのばし、とんぼが羽根をひるがえす、子どもにとっては大人の目を逃れられる恰好の遊び場に近かった。体つきにまだふくらみの出ていない女の子が溝越しのぶどうの枝目当てに飛びはねる。遊びにうつつを抜かして声をあげると女たちが追いたてる。そのような少女時代の出来事が今ありありと思い出される。枝すだれが窓をおおい、その隙間から外の気配が見て取れる中絶医の家は子ども心に何か不気味に思われる。‘grapevine’には秘密情報、デマ、うわさ話という意味もある。禁じられた行為がひそかに行われているために、女たちも罪の意識と不安におののいている。女たちはこのような苦痛をもたらした者への憤りを露に^{あらわ}にすることができない。その憤りをはらんだ‘Man can do things to you’という言葉は少女たちに投げるしかすべはない。things という漠然とした表現がきわめて効果的である。男性が女性の一切を掌中に握っていることが暗示されるからである。しかしあえて意味を明確にするならば、things とは男性の、妊娠させる行為と、させた妊娠を阻む行為の両方である。もっとも、中絶医の中には女性もいたではあろうけれども。

最終部 part V に移る。

V

And finally, my Lord, looking at this long experiment...whether it be considered as the methodical education of a savage or as no more than the physical and moral treatment of one of those creatures ill-favored by nature, rejected by society and abandoned by medicine, the care that has been taken and ought still to be taken of him, the changes that have taken place, and those that can be hoped for, the voice of humanity, the interest inspired by such a desertion and a destiny so strange—all these things recommend this extraordinary young man

to the attention of scientists, to the solicitude of administrators, and to the protection of the government.

1. The doctor in "Uncle Vanya":

*They will call us fools,
blind, ignorant, they will
despise us*

devourers of the forest
leaving teeth of metal in every tree
so the tree can neither grow
nor be cut for lumber

Does the primeval forest
weep
for its devourers

does nature mourn
our existence

is the child with arms
burnt to the flesh of its sides
weeping eyelessly for man

2. At the end of the distinguished doctor's
lecture
a young woman raises her hand:

*You have the power
in your hands, you control our lives—
why do you want our pity too?*

Why are men afraid
why do you pity yourselves
why do the administrators
lack solicitude, the government
refuse protection,

why should the wild child
weep for the scientists

why

part IV までとは異なり、冒頭の引用はイタールの第2 報告書（1806）からのものであり、彼が5 年にわたる野生児の観察と教育をまとめたその最終部分である。

最後に閣下、こうした長期の実験をどのような観点から捉えようとも、自然人の方法的教育と考えるにせよ、自然に疎んじられ、社会に棄てられ、医学に見放された者の一人に対する身体精神療法としてみるにせよ、後に施された治療もまだ施されなければならない治療も、すでに起きた変化も、人間愛の声も、これほど完全な遺棄、これほど数奇な運命が引き起こす関心も、あげてこの異常な青年に対する学者の注目、当局者の配慮、政府の保護を呼びかけているのです²⁵⁾。

part V はふたつに分けられ、1は『ヴーニャ伯父さん』²⁶⁾（チェホフ作、1897、『森の主』1889を改作したもの）中に登場する医師の台詞で始まる。この医師の感慨は、続くリッチの詩の中で自然破壊の進む現在の状況と重ね合わされるのであるが、まずこの医師の考え方を述べることにする。

アーストロフは田舎医者の不遇をかこつが、彼がもっと我慢できないのは、インテリ連中の料簡が狭いこと、感じ方が浅いこと、目先のものしか見えないことである。彼は自然を愛している。彼は言う「森が好きならこれも変てこ。肉を食べないと、これもやっぱり変てこ。いや今日ではもう自然や人間に向かってじかに純粹に自由に接しようとする態度なんか薬にたくもありはしません」「百年二百年たったあとで、この世に生まれてくる人たち (they) は、みじめなわれわれが、こんなにはかばかしい、こんなに味けない生涯を送ったことを、さだめし輕蔑するだろう」とアーストロフは慨歎する。彼は本職の医師の仕事もするが自然を守ることに時間と心を費している。彼は言う「今やロシアの森は斧の下でめりめり音をたてているよ。…人間は物を考える理性と、物を創り出す力とを天から授けている。ところが今日まで人間は、創り出すどころか、ぶち毀してばかりいた…土地は日ましに、いよいよますますやせて醜くなってゆく…しかし僕のおかげで伐採の憂目をまぬかれた、百姓たちの森のそばを通りかかったり、自分の手で植えつけた若木の林が、ざわざわ鳴るのを聞いたりすると、僕もようやく、風土というものが多少とも、おれの力で左右できるものだと言うことに思い当るのだ」

90年も前に自然をむさぼる人間の欲をこのように激しく、しかも医師の口から糾弾したチェホフの考えの深さに驚歎させられる。人の心身の健康と自然の営みとが係り合うことをチェホフは悟っている。リッチはこの医師を、イタールをはじめとして野生児を教育しようとした人々や現代の医師と対照させることによってチェホフの考えを浮き彫りにし、読者がチェホフを再評価するように示唆する。

しかし、より重要なことは現在行われている森やその他の自然の破壊に真剣な注意をはらうことである。Does the primeval forest... 以下での手法は反語疑問文の使い方と、weep for の使い方の点で巧みである。自然には感情はないとされているけれども、森の木々も涙を流すと考える人もいるかも知れない。だが、森は人間を哀れむはずはない、人間は森を痛めつけてきたのであるから。たたみかけるような反語疑問文は読者の心をかき乱す。そして次の行はさらに一層衝撃的である。

is the child with arms
burnt to the flesh of its sides
weeping eyelessly for man

おそらくこれはリッチが実際に見た、ヴェトナムの戦火で火傷をした子どもの姿であろう。脇腹までただれ、眼がつぶれるほどの傷を受けた子どもがおぼつかない腕 (arms) でいたいけにも武器 (arms) を構えて泣いている。一体この子は人類の不幸を嘆いているのだろうか、とリッチは問いかける。この子に致命的な傷を負わせたその人類のために泣いているかだって？とんでもない。このようにしてリッチは戦争を、その下手人を激しく弾劾する。

2の部分は高名な医師の講演とそれに対する一女性の問いかけで始まる。おそらく、学術的に高度な内容の講演と比べてこの若い女性の訴えは素朴なものであろう。しかしそこには本質をつくものがあるように思われる。このやりとりがなされる状況を特定することは出来ない。しかし読者は個々の体験を通して自分なりの場面設定を行うことが出来よう。次いでリッチは Why で始まるいくつかの問いを読者に向けて投げかける。‘men’は男性一般を、‘you’は医師を指すと思われる。why do the administrators 以下の3行においては、part IIの終りの場合と同様にリッチはイタールが用いている言葉, administrators, solicitude, protection, government を取り入れているが、イタールが「政府」や「当局者」に協力を懇請しているのに対して、リッチは彼らの拒絶的な態度を指摘し非難する。そして part II と同様ここでも曖昧さが残る。solicitude や protection を受ける対象が明確にされないからである。もちろんそれは力の弱い人々、すなわち子どもや障害のある人々、そして女性であると考えられるけれども。

最後に「科学者」が取り上げられる。これもイタールが用いた言葉である。why should the wild child/weep for the scientists の2行を理解するためには、報告書から引用されなかった部分、すなわち野生児が流した涙に関連した部分について知る必要がある。その箇所を概略する。

この子の知的能力を引き出すための一方法としてイタールは色と形の異なる厚紙の仕分け作業を課した。しているうちに疲れていやがり粗暴になったのを、イタールはこの子が極度の高所恐怖症であることを知っていたので、その性質を利用しておどしたところ、恐怖のために全身は震え、冷汗を浮べたが、イタールは直ぐにこの子を作業台のところへ連れて行き、作業をするように命じた。先の粗暴な態度は消え、のろのろではあるが作業をやり終え、その後ベッドに身を投げ出して大声で泣き続けたのであった。これがイタールの知る限りにおいてこの子が涙を流した最初であった²⁷⁾。さらにイタールは「涙を流すという情動はその直後にこの子の知性を急速に発達させ、少し前までは克服できそうになかった困難を易々と克服できるようにした。そしてこの子が涙を流している最中に叱責の口調を急にやめ、やさしいそぶりや口調、お前に失望させられて実に悲しいというそぶりや口ぶりに変えるとますます涙は激しくなって、彼の中の精神的人間の部分をめざめさせることになった」²⁸⁾と述べている。

イタールはこれを教育の効果とみなしたのであるが、リッチはこれを人間的な教育とみなしていない。why should the wild child/weep for the scientists は教育の名の下に力無き者をいたぶり、その上、いたぶっている者に対して苦勞をかけて申訳ないという気持ちを起こさせ涙を流させたそのことの非情さについて問いたただすのである。‘weep for’は part V で都合3度用いられている。それぞれ、物言わぬ森の破壊が、あらがうすべを持たない子どもの殺戮が、そして野生児の原始性の圧殺が問い直されている。

最終行 why はこれらの問題を改めて考えることをわれわれ読者に促す。終りはまた新たな出発である。この詩においてリッチがなした発掘は現代と未来の世界にとって重要な意味を持っている。われわれはこの発掘の成果を無にしてはならない。

文 献

- 1) 拙稿「リッチの第7詩集 *Diving into the Wreck*」『京都大学医療技術短期大学紀要』p.73-87, 1986. 参照.
- 2) “Planetarium”, Adrienne Rich: *Poems Selected and New*, 1950/1974, Norton, N. Y., 1975, (以下 *PSN* と略) p. 146.
- 3) “Snapshots of a Daughter-in-Law”, *ibid.*, p. 48.
- 4) *ibid.*, p. 49.

- 5) "Power", Adrienne Rich: *The Dream of a Common Language: Poems 1974-1977*, p. 3. Norton, N. Y. 1974.
- 6) "Snapshots of a Daughter-in-Law, op. cit., p. 50.
- 7) *ibid.*, p. 50.
- 8) "A Valediction Forbidding Mourning", *ibid.*, p. 172. "From an Old House in America", *ibid.*, p. 245.
- 9) When We Dead Awaken: Writing as Re-Vision (1971), *Adrienne Rich's Poetry*, ed. Barbara & Albert Gelpi, Norton, N.Y., p. 90.
- 10) *Diving into the Wreck, Poems 1971-1972*, Norton, N.Y. 1973, Jacket 参照.
- 11) 新訳『アヴェロンの野生児』, J.M.G. イタル著, 中野善達・松田清訳, 福村出版, 東京都, 3頁.
- 12) 同書, 3頁.
- 13) 同書, 第1報告(1801), 26頁.
- 14) David Kalstone: *Five Temperaments*, Oxford U.P., N.Y., 1977, p. 165.
- 15) 『アヴェロンの野生児』, 27頁.
- 16) 同書, 27頁.
- 17) 同書, 27頁.
- 18) 同書, 50~51頁.
- 19) 同書, 54頁.
- 20) 'All those dead letters/rendered into the oppressor's language/Trying to tell the doctor where it hurts/like the Algerian/who walked from his village, burning/his whole body a cloud of pain/and there are no words for this/except himself', "Our Whole Life", *PSN*, p. 166.
- 21) 'knowledge of the oppressor/this is the oppressor's language/yet I need it to talk to you', "The Burning of Paper Instead of Children", *PSN*, p. 149.
- 22) 『アヴェロンの野生児』, 53頁.
- 23) 同書, 54頁.
- 24) Adrienne Rich: *Of Woman Born*, Norton, N.Y., 1976, Chap. VI 他参照.
- 25) 『アヴェロンの野生児』, 140-141頁.
- 26) 『ブーニャ伯父さん』 神西清訳, 世界文学全集12, 河出書房, 東京都, 1954.
- 27) 『アヴェロンの野生児』, 71頁.
- 28) 同書, 110頁.